苦しい時を乗り越えた人にこそ、本当の笑顔が…

筋ジストロフィーの双子として生まれた青年（人工呼吸器、心臓ペースメーカー装着）が、１（ひと）１０（と）人（ひと）の繋がりを込めて１１０人の笑顔を描き続ける今に至る２年間のドキュメンタリー番組：「この世に僕たちが生きていること」を見た。

兄弟が中学時代に、姉がプレゼントした油絵セットで描き出し、養護学校高等部卒業後、家族は兄弟のために自宅の他にアトリエを兼ねたカフェを開設し、兄弟の絵画活動の援助の傍ら、母、姉妹が来客に対応の日々。
あくまで、兄弟の制作活動の体調に合わせての営業から、カフェの名は「ときどき館」にしたとか。

青年（兄）の弟は３年前に亡くなるが、その葬儀には山村にも拘わらず、６００人近い方がお別れに来てくださり、青年は、「自殺するにも人の手を借りなくてはならない。死ぬことも辛いけど、生きていくこともそれに匹敵するものだと意識してしまう」自分たちが、こんなにも多くの方々が見守っていてくださってることを知る。
そして、「本当の笑顔を持っている人たちは、幸せな人生を歩んでいる人ばかりじゃない。逆に、『弱さ』を知って始めて喜びをかみしめたり出来るんじゃないか…。苦しい時を乗り越えた人にこそ本当の笑顔が出ると思うし、そうした人たちから何かエネルギーを受け取りたい。」と、笑顔（モデルは、家族、病院のスタッフ、患者さんたちの笑顔）を描くことを決意したよう。

母親は、兄弟が４才の時に難病と解った時はしばらく泣いていたが、「この子たちに何をしてやれるかなと思った時、与えてやれる薬は笑顔かなと思い、今もそう思っている。」という。
確かに、画面からはどんな時も常に溢れる母の笑顔。そして、姉妹の屈託のない笑顔。
画面で紹介される多くの方々の笑顔の絵は、どれも優しく、素敵な笑顔だが、青年が何よりも描き続けているのは、喜びをかみしめ、苦しい時を乗り越えた家族の笑顔でないだろうかと、ふと思った。

青年は、症状が進行し、今はアトリエに通えなくなり自宅で制作している。
笑顔の方は約５０人を描いたが、迫る死を自覚しつつ、「現実をしっかり受け止めて、逃げるんじゃなく、ちゃんとそれを受け止めて…」との自分の最後のメッセージを込める、初めての１００号の大作に取り組んでいるよう。

追伸：青年のブログサイトは、http://yaplog.jp/artist_masashi/　ですのでご覧下さい。

（2006 年 11 月 21 日　記）